

大塚 敬節
矢数 道明
責任編集

世
近漢方医学書集成

95 浅田宗伯 一

名著出版
刊



南京中医药大学图书馆版权所有

世漢方医学書集成 95 浅田宗伯(一) 第Ⅲ期 全40巻

昭和五十七年十一月二十五日 発行

編者 大塚敬節

発行者 矢数道明

発行者 中村安孝

発行所 株式会社 東京都文京区小石川三ノ十ノ五
電話東京(八)五二二七〇番代
振替口座 東京七二〇七四九番

製版所 株式会社 日本写真製版社

印刷所 有限会社 伊藤印刷

製本所 辻本製本所



予約限定版

落丁本・乱丁本はお取替えます。

責任編集

大塚敬節

矢数道明

編集委員

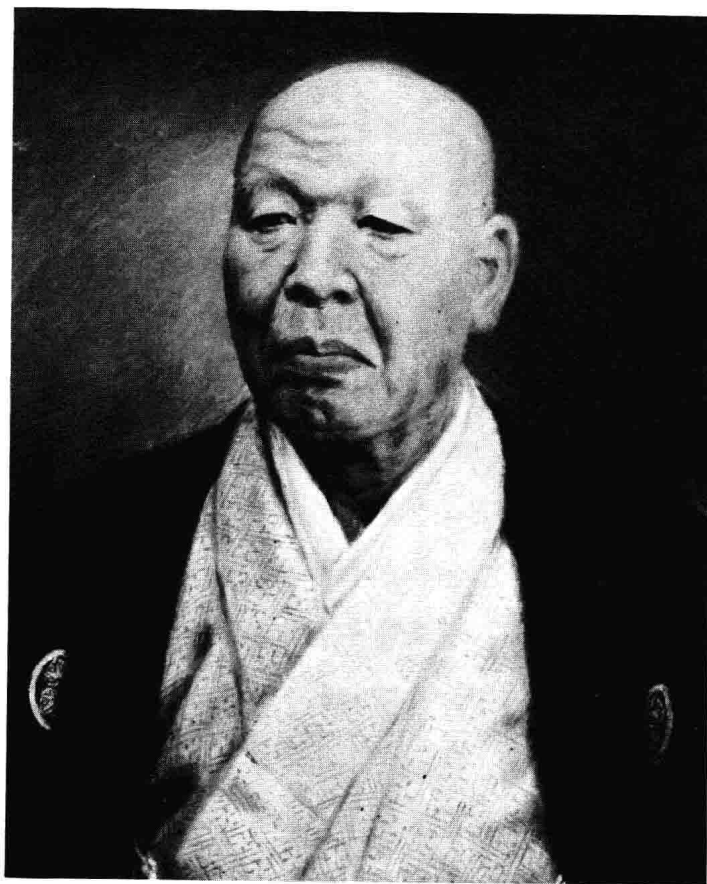
山田光胤

寺師睦宗

大塚恭男

矢数圭堂

松田邦夫



浅田宗伯翁肖像 济世塾 木村博昭(長久)氏旧蔵

凡 例

- 一、本書第九十五卷「浅田宗伯(一)」には、『勿誤藥室方函』を収録した。
- 一、本書は全て影印版によって収録したが、影印にあたっては次のようにした。
 - イ、新たに柱と頁数を付した。
 - ロ、底本は原寸で、一頁に半丁ずつ収めた。
 - ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。
 - ニ、底本にある蔵書印及び書き込みは省略した。
 - ホ、印刷不明な箇所は、他の刊本等により補正したところもある。
- 一、底本は次の通りである。
 - 勿誤藥室方函 刊本 (明治十年版) 二卷一冊(矢数道明所蔵)
- 一、解説は矢数道明(北里研究所付属東洋医学総合研究所長)が執筆した。

明治漢方最後の巨頭

栗園 浅田宗伯の人と業績

矢 数 道 明

一、浅田宗伯翁略伝

(1) はじめに

私は昭和五十六年十月三十一日、見渡すかぎり秋の紅葉に包まれた信濃路を訪れた。松本市医師会の長老で、その昔東京医専の同級だった平林達郎博士の招きによるもので、平林君は古くから漢方の研究に志し、郷土の先哲名医浅田宗伯翁について詳しい調査を行っていたので、すべて同君夫妻に一任した。

そして私は松本市の郊外、その昔信濃国筑摩郡栗林村（現在松本市島立三八七九となっている）



將軍家より拝領の鎧兜



ありし日の浅田家邸宅の絵図



浅田家と当主浅田和夫・恒恵御夫妻



和宮より拝領の打掛けを直した

陣羽織

と呼ばれていた翁の出生の地を訪れ、浅田総本家を守つて居られる浅田和夫氏宅で、翁の遺品として保管されていた、将軍家より拝領した立派な鎧兜よろかぶと、和宮様わのみやより拝領した美しい打掛けうちかけを仕立て直した陣羽織じんばおり、宗伯翁の肖像や筆蹟、数多い書簡の類、また浅田家十七代目を嗣いだ現後嗣和夫氏の作成した詳細を極めた浅田家系図（折り込み）を閲覧して、はじめてその家系譜の全貌を知ることができた。

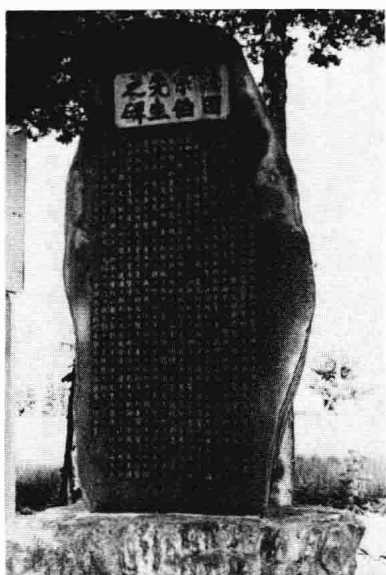
次いで松本市役所島立支所しまたち前に、昭和十六年十一月十六日、恰も皇紀二千六百年を記念して、村民が挙つて建立した「浅田宗伯先生之碑」に案内された。この彰徳碑しょうとくひの上段を飾る題額は、当時の枢密顧問官荒木寅三郎博士が揮毫し、碑面を埋めた彰徳文は、松本出身の佐倉順天堂病院長佐藤恒二博士の撰文並びに書で、いずれもすばらしいもので、仰ぎ見るばかりの巨大な自然石に刻まれていた。

彰徳碑の偉容に驚きながら、次はほど近い浅田家累代の菩提寺、西生寺さいせいじに詣で、浅田家先祖代々、医系としては宗伯翁の祖父東斎とうさい、父濟庵さいあんの碑前に花束を捧げ、焼香をしたが、永年の念願が叶つてまことに感銘を新たにした。

菩提寺の周辺は、人家もまばらで畑地が多く、眺望もよく、東には遙かに美ヶ原みヶはらの高峰が聳え、



父・浅田済庵の墓（西生寺）



浅田宗伯先生之碑

西に遠く北アルプスの連峰が夕陽に輝いていた。

翌早朝、翁の祖先が城主であった内田の里にある浅田城趾を訪れ、翁のゆかりのある金峰山牛伏寺に登り、翁が二十四歳のとき、この金峰山に登り、下って、浅田城趾に付んで新たに志を立て、再び江戸に出発したという、その昔を偲んだ。

○

英雄碩学の大人物は、常に山紫水明の自然環境にはぐくまれて生まれるといわれているが、信濃の国は群山四方を囲み、山は険しく、流れる水は清く、堅忍不拔、百折不撓の大人物を多く輩出してきた。漢方医学の領域においても、その昔内藤希哲や尾台浅嶽を生み、本稿の主人、明治期漢方最後の巨頭と謳われた浅田宗伯が生まれ、また明治後期漢方衰微

の極に至っては、あの『医界之鉄椎』の著者和田啓十郎が生まれ、昭和期漢方復興の導火線とな
っている。

私はいま、幕末より明治中期において、わが国の漢方医界に不滅の大業績を残した、国医浅田
宗伯翁の人となり、その業績の一端を述べてみたいと思う。

(2) 出生と家系

「明治漢方最後の巨頭」、「良医にして良相」と謳われた栗園浅田宗伯伝は頗る多く、選択に迷う
ほどである。そのすべての重要事項をあまねく網羅して、しかも簡要にまとめられてあるのは、
『新版大日本人名辞書』の「浅田宗伯翁略伝」であろう。それによると、



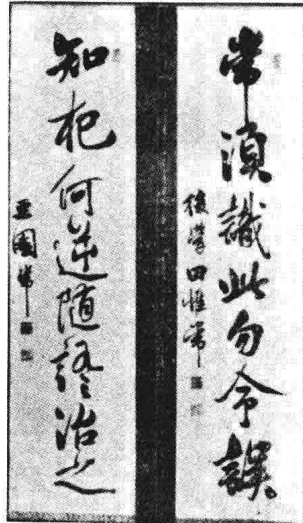
浅田宗伯肖像

「漢家の名医、信州筑摩郡栗林村の人、因て栗園りぐんと号す。初名は直民、後おの惟常と改む。其先は源
頼光に出づ。筑摩郡浅田の荘に住するを似て浅
田と名乗れり。祖父、父共に医術に通じ、文筆
亦妙なり。宗伯幼時は極めて壮健、而も魯鈍に
して『四書』『孝経』『左伝』『文選』を習うに通曉
する所なし、師大に之を卑ひむ。年十五にして『徂
徠集』を読み大に困苦し、『戦国策』を読むに至
りて『史記列伝』を参照し、標註を参照して稍

常須識此勿令誤

(常に須らく此を識るして、誤らしむることなかれ)
知犯何逆隨證治之

(何の逆を犯かすを知り、證に隨つて之を治す)



淺田宗伯遺墨

業漸く行わるるに到れり。偶々在郷の父危篤の報あり、到れば已に後れる一日、宗伯痛恨已む能わず、大に名を立て家風を興し以て之に酬いん事を誓い、家事を親戚に托して单身江戸に還り、昼夜勉励せり。当時宗伯惟えらく、今や学と術とは二途に分れ、何れも他に疎にして以て病を托するに足らずと。即ち『脈法私言』『傷寒弁要』『雜病弁要』等を著わし、病理治法合一の論をなし、門人大に増加せり。又、惟えらく医道を壞る者は洋医に若くはなしと。『原医』『警医記事』等を著わして西洋説を弁駁せり。是より十余年、声名次第に盛んに、諸侯より招聘屢々

々会得せり。而も志氣凡童に異なる所あり、暇ある毎に『稗官野乘』を読んで古の豪傑を希えり。而して祖母常に傍にあつて其立志を責めたりと言う。後高遠藩に遊び医术を修め、又京都に入り師に就て専ら『傷寒論』を研究し、又儒を頼山陽に学ぶ。刻苦研磨の末、江戸に出でて初めて業を開く。三年一人の宗伯の名を知る者なし。時に人の紹介に仍て幕府の医官本康宗円に謁し、是れより紹介によつて他の諸名家に附し、

なるも辞して就かず。安政五年（一八五八）將軍昭徳公に謁して徴士ちようしとなり、後、仏国公使の病を治して幕府より白銀の賜あり、仏帝より時計、羶羯せんかつ（じゅうたん）等を贈られたり。慶応二年（一八六六）昭徳公の病を診して脚氣衝心とし、江戸に還かえつて天璋院初め大奥の侍医となり、三十口俸米二百俵を受け、法眼に叙せられたり。幕府傾頼けいたいに方あたり、和宮及天璋院の命に依り、熾仁親王こじんに謁し江戸鎮撫を請い、周旋甚だ努めたり。宗伯身医を業とするも有為の氣多く、幕府の末路には川路左衛門、水野筑後、小栗上野介、黒川近江、井上信濃等と交を結び、執政と時事を談じて口角沫を飛ばす事も屢々なりき。その他、藤森天山、林鶴梁、佐田介石、羽倉外記等と交り篤し。明治四年職を辞し牛込に隠居せしに、來つて治を請う者多く、清国公使、朝鮮公使等常に來つて診を求む。明治十二年皇太子誕生の節、宗伯は尚藥しやうやくとして常に宮中に伺候し、年俸千円絹四匹を賜い、従六位に叙せられ、是れより常に宮中に伺候せり。十六年滋宮しのみや、増宮ますのみや兩親王医藥の効なく薨去す。宗伯自ら責て骸骨を乞いしに許されず、即ち其職にある十年、明治二十一年五月東宮侍医の職を辞し、終身年金千円を賜い、且つ従五位に昇叙せられたり。宗伯老て愈々健、爾來益々漢医家の泰斗として老後の勉強怠りなし。明治二十七年三月十六日終に逝けり。年八十一。宗伯常に『論語』を以て道德の標準とし、『傷寒論』を以て医術の玉条金科とし、常に同人に此兩書を読ましめたり。又詩文を能くし、漢文殊に勁健けいけんなり。著わす所上に挙げたる外、我國の医伝欠けたるを補わんが爲めに著わせる『皇国名医伝』『先哲医話』『杏

林風月』等あり。常に旧風を慕い、髪を剃り、駕籠に乘て往来す。皇太子嘉仁親王の病を療するの功を以て三十三年七月十六日、従四位を贈らる。」（振り仮名、西暦年、注は筆者）

○

浅田家系図によると、宗伯の祖先は多田源氏、源満仲（九一二―九九七）の子、大江山酒童子を征伐したことで有名な源頼光の第五子、乙葉三郎頼季であると宗伯が述べている。はじめ摂津の国に住み、後に信濃に移り、さらにその孫の時代に筑摩郡内田郷浅田荘に住むようになり、それ以来浅田を以て家名とするようになった。浅田城に在った祖先が、桔梗が原の戦で武田勢に敗れ、家臣従者が栗林村に隠れ棲み、世々農業に従事していたが、祖父東斎が医師となり、父済庵も医業を継ぎ、多くの里人より敬愛されるようになった。

宗伯は文化十二年（一八一五）五月十三日、栗林村に生まれ、幼名を直民と呼び、後惟常と改めた。字を識此、号を栗園と称した。識此は此を識るといい、『傷寒論』の桂枝湯のところの「常に須らく、此を識つて誤らしむること勿るべし」の中より採つて、病者に接して誤りのないよう、常に此を識ることを終生の戒めとした。そして葉室名も「誤らしむること勿れ」より採つて、「勿誤葉室」と名づけ、『勿誤葉室方函』『勿誤葉室方函口訣』の書名が生まれた。

○

治験集『橘窓書影』の第四巻の終わりに、浅田宗伯は七十一歳に至る自序を載せ、自らその伝

記を掲げている。宗伯の自伝によると、幼年時代はいかにも魯鈍の方で、四書五経を教えた師匠も、首を傾げたということである。

ところが十五歳の頃より自ら志を立て、秘かに大望を抱くようになり、高遠藩の藩医中村仲俵の門に入り、愈々その志を確立してきたという。

(3) 京都遊学

天保三年（一八三二）、十八歳のとき郷里を去って、名医、碩学が雲集していた京都に遊学した。即ち、吉益東洞の門人中西深斎の塾に入り古方を学び、その傍ら川越家や福井家などにも出入して、見聞を広め、経書を猪飼敬所^{いかいけいしよ}に、史学を頼山陽に学んだ。さらに大阪にあった大塩中斎の門を叩いて陽明学を学んだが、中斎に陰謀のあることを知ってその許を辞し去ったという。

宗伯は頼山陽に師事して、歴史学と文学を学んだ。後に『皇国名医伝』など多くの医史学書を著わし、また大正天皇に主治医としての任を果たしたばかりでなく、『本朝近古史』についてご進講申し上げたということである。

宗伯が頼山陽よりうけた影響は大きく、京都を去るとき山陽は「大丈夫、天下これ無かるべからざる人と為ること能わずんば、則ち当に天下これなかるべからざる書を著すべし」と訓^{しな}えたということである。宗伯は日本において無くてはならぬ大人物となり、その責務を果たし、不朽の大著を次々と数多く残した。

京都遊学中は収入の途とてなく、家郷よりの送金も乏しく、貧困を極め、筆や紙を求めることもできず、路傍に仏の画像を掲げ、『傷寒論』を読みながら、鉢を叩いて道行く人々の賽銭を得たこともあり、街角に立って辻説法をして仏の道を説き、喜捨の恵みを享けたこともあったということである。

余談ながら、頼山陽も浅田宗伯も、どちらも酒を嗜むこと深く、山陽は「劍菱」を愛好し、宗伯は「正宗」が好きだったというのである。そして山陽は一度も他人に酒の爛をさせたことがなかった。宗伯も山陽に倣って常に自ら爛をし、山陽の塾に在った頃、毎夜行燈の火の上に徳利を吊るし爛をし、これを楽しみつつ書を読んだという。壮時の酒量は二升であったという。

(4) 江戸遊学と父済庵の死

京都に在って勉学すること四年、天保七年（一八三六）、二十二歳のとき、父済庵の弟、佐久間宗英が狭山侯の侍医をしていたのを頼って江戸に上った。その縁故によつて翌天保八年の春、狭山侯の医員となり、医業を開いたが、三カ月間患者は数えるほどしかなかった。ところがこの年三月、宗伯は疫病に罹つて永く病床に就いてしまった。そして翌二十四歳の四月十三日になつて、父済庵の危篤の報せがきた。孝心の篤い宗伯は直ちに旅装を調べて、夜に日をついで家郷に辿り着いたが、父済庵は一日前の十六日にこの世を去っていた。宗伯は「悲嘆骨に徹し、畢生の痛恨事」と天を仰ぎ、地に伏して嘆き悲しんだ。



金峰山麓の浅田城趾

母から渡された父済庵の遺言書には、「苟も医術を治めて君子の林に列し、また善く古の道を行い、以て世恩に報いなば、その継述するところ此より大なるはなし」と認めてあり、その遺訓と共に、一振りの伝家の宝刀が添えられてあつた。

宗伯は父済庵の喪に服すること暫くして、一日金峰山に登り、牛伏寺ごふくじに詣でた。この牛伏寺は、信濃観音霊場三十三カ所の第二十七番観音で、「開運厄除け」として聖徳太子の時代からの古い歴史を持つてゐる険しい霊場である。

山を降りた宗伯は、内田の里に残る、祖先浅田長政の居城であつた浅田城趾の草原に佇んで、父済庵の遺書を胸中に繰り返し、伝家の名刀を添えた父の心に感奮して、天下の名医たらんと志し、再び江戸に上つた。

(5) 宗伯の躍進年譜

宗伯が江戸に上り、未だ名も頭れず、生活に苦勞しているとき、その転機を与えてくれたのは、幕府の医官、本康宗円との出会いであつた。父を失つて再度東上したところ、宗伯の居宅は火災によつて灰となつていた。心機一転を決意した宗伯は七月に剃髪し、このとき本康宗円がはじめて名を「宗伯」と命名してくれたということである。「宗伯」の名の由来